

日本福祉文化学会北陸ブロック

福祉文化現場セミナー in 栃尾 芳香稚草園(ほうこうちそうえん)

「～こども支援のレンズから見る福祉文化活動～」

関西ブロック 岡村 ヒロ子

【1日目;10月20日(土)】

* 内容; 栃尾地区の紹介・社会福祉法人芳香稚草園の取組み・ワークショップ(「心や地域を豊かにする取組みとは?」「どんな取組みがあると嬉しい?」・園舎見学&絵本の読み聞かせ体験・子どもとの交流)

2016年の「福祉文化現場セミナー in 越後」での佐藤義尚さんのトークは強烈の一言だった。中越大水害から園児たちを救ったという武勇伝に、いったい「栃尾」でどのようなこども支援を展開なさっているのだろうと興味津々だった。現在、栃尾の8割の子ども達が通う芳香稚草園は、佐藤義尚さんの曾祖父の時代から91年の歴史をもつ。地域の子育て支援一筋に携わってこられたというその重みは境内に足を踏み入れると自然に伝わってくる。寺の背後にせり立つ木々、2004年、ここから大量の土石流が境内を貫通したのかと思っただけで言葉を失ってしまった。

芳香稚草園の命名の由来は、子どもたち一人ひとり(稚草)は香しく輝かしい(芳香)存在だという。「生命尊重の保育」を基本理念として保育目標を「もっと素直になれたらいいな もっと感謝がでたらいいな」と掲げている。法人は地域の方々が幸せに心豊かに過ごす環境づくりにもチャレンジしている。地域公益活動と称した「ののレンジャー」はその一つで若い保育士のユニークな発案が実を結んだ。「のの」は「のの様ののの」、世界中の人を助けるヒーローなんだとか。栃尾まつりの民謡流しの後に、法人の職員が着ぐるみを着て汗だくでパフォーマンスをするそう。法人は知らなくても「ののレンジャー」は知っているという変な定着ぶりを呈している。今回の現場セミナーでの意外性のある企画運営も若い職員に全面的に任せたという。佐藤さんは「僕はなにもいわないんですよ」とにこにこ語っていた。そのお顔は和尚そのものだった。

【2日目;10月21日(日)】

* 内容; 宝光院本堂講話・フィールドワーク『栃尾めぐり』(宝光院→越銘酒造→雁木通り→秋葉神社)

栃尾は上杉謙信(長尾景虎)公が青年期を過ごし初陣を飾った地とあって、多くの伝統祭りが代々受け継がれている。また雪解けの水は美味しい米を作り、地酒は天下一品。今ではメジャーになった「あぶらげ(油揚げ)」と食文化も豊かである。屈指の豪雪地帯でもある栃尾では自分の家の軒先を提供する「雁木造り」が形成されている。新潟大学の学生がデザインした雁木もあるそうで、古きものを継承し、そこに若い力も注いで新しい栃尾の街創りに取り組んでいることを実感した。石田会長が掲げる「地域発の福祉文化の台頭」、新潟栃尾からそのスタートを切った北陸ブロックの健闘を讃えたい。



水の音と油揚げの味と — 栃尾現場セミナーでのこと

斎藤 遙山

現場セミナーから帰って、地区社協の研修で甘楽郡南牧村を訪ねました。高齢化率日本一という村で、その現状と方策を勉強するための訪問でしたが、お隣の上野村にも寄ってくれました。

バスの中で、「上野村の方が明るいね」というような会話がありました。ちょうど紅葉の盛りで、上野村は雑木が多く彩があります、他方の南牧村は杉・檜の植林が迫る尾根の近くまでなされていて、勾配が急なので「暗い」という印象を受けます。半世紀で人口が10分の一にまでなった南牧村に対し、巨大ダムからの納税があり国からの補助や話題作りが多い上野村は「明るい」と感じた方もいたのでしょう。

南牧村は、かつて、甲信と上毛を結ぶ街道に位置していて、江戸時代には砥石の一大産地として栄え、勾配を利用した蒟蒻芋の産地であり、この地には豪商に近い人がいて、当然山林の育成も盛んでありました。ある意味で南牧村は開発されたていた村であり、上野村は山村そのものとして残された村なのでした。

多くの山村がそうであるように、1960年代までは家庭生活のエネルギーは炭と薪に頼っており、それは里山から山村にかけての産物であり、それでもって都会との相互交流(エネルギーと資金・資材の交換)が成立していました。

その小さな生活の火を一方的に変えたのが、石炭石油であり、原発の巨大エネルギーでした。それによって、それぞれの地域でともに生きあってきた生活を破砕し、棲む場と「生産」(税も)を奪ってきたのですが、なぜか政治で食っている人たちは「過疎は地方の責任」であるかのような顔をしているのです。

そんな対比から栃尾の町を振り返ってみると、堂々とした山都の雰囲気、何の必要があって「長岡」ごとくと合併しなくてはいけないのかという気がしました。決して長岡市民のことを腐すつもりではなく、農山村や自然を「国の基礎」であるとする政治家がなく、近世から形成されてきた地域のコミュニティに配慮することのない政治のありようの貧しさが、「過疎」を演出しているのだと思うからです。

現場セミナーでは、芳香稚草園の活動と地域とのつながりについて、ご教示いただきました。社会福祉法人としての活動が充実している法人だから、地域においても、地域福祉実践力として充実して活動することができる、当たり前のことに感心させられたことでした。

小出から栃尾に入って、農村レストラン「すがばたけ」で昼食をとりましたが、こういう農事法人が活動できるのも地域の豊かさの一つと思いました。それが具体的に表れるのが、「栃尾の油揚げ」で、観光マップの会員だけでも17店が加入していました。ですから、「栃尾の油揚げ」は名物なのではなく、文化なのだと思うのです。

交流会でのお酒もおいしかったし、むろん「油揚げ」もうまかったのです。

翌日、フィールドワークで、酒蔵と雁木通り、秋葉社を案内していただきましたが、どこを歩いても川瀬の水の音が聞こえてくる、素敵な街並でした。

見学させていただいた法人も水害に遭っていることですし、町も何度も被災しているそうですが、この盆地に集まってくる清冽な水こそが、お米や野菜やお酒や「油揚げ」のもとであり、それぞれ天然の与えたもうたものと思った次第です。

セミナーのもう一つの感想は、参加者が少なかったことの驚き、長岡の社会福祉協議会の関係者と都会（例えば東京、例えば新潟市とか）の方の参加がなかったこと、それは「自然的人間」が等閑に付されていることの一つの表れなのかもしれない、といくらか寂しい気がしました。

わたくしは、1994年に米山の山中と柏崎で行われた「福祉文化セミナー」に初めて参加して、交流会で、いま「柳田國男を勉強する常民学舎」で福祉を考えている、と発言して、一番ヶ瀬先生から「東京にもおいでよ」と言われたことでした。その折、生意気にも「東京は好きではない、沖縄とか越後とかなら参ります」と申しあげました。そう云ったからだけではないのですが、以降、なるべくそのようにしてきたつもりです。しかし、かれこれ、わたくしも「停年」なのかなと思っているこの頃なのです。

(2018年11月4日)



芳香稚草園と福祉文化のこころ

北陸ブロック理事 関矢秀幸

私たち新潟福祉文化を考える会は、会の規約も会員名簿もありません。その都度企画した現場セミナーに「この指と一まれ」の方式で平成5年から開催してきました。しかし、昨今の事情は、我々の高齢化もありますが、職場での業務をこなしながら、運営は厳しいものがあります。開催地社協や施設の力をかりて、何回か実施してきましたが、セミナー終了後は、それで終わりであり、私たちの働きかけが足らなかったと痛感しております。本来であれば、福祉文化の趣旨を理解し、セミナー会場を提供いただいたわけであり、引き続き団体会員へ、また協力施設への動きを我々はつくりえない状況となっています。「ただ単にセミナーを開催すればよい」の時代は終わった気がしています。年々減少していく新潟会員ですが、今回は芳香稚草園さんの新規加入もあり、安堵しているところです。また、理事長の佐藤義尚さんの職員育成は素晴らしいものがあり、いくら業務命令とはいえ、職員の皆さまが真摯にセミナー運営に取り組まれており、自分たちで相違工夫したプログラムを企画立案して実現していく過程は素晴らしいものと感じました。また、何かあると佐藤理事長への「ほうれんそう」報告、連絡、相談もあり、今回なぜ、芳香稚草園でセミナーを開催するのか、職員の皆さま全員が理解され、取組まれる姿をみるだけでも、セミナー開催の意義がありました。今回は大御所である、石田会長、岡村事務局長も参加され、大いに語り合うことができたと思います

平成元年に一番ヶ瀬康子会長が提唱した福祉文化のこころを理解しているつもりですが、まだまだ修行がたりません。今後も福祉文化を基点に出来る範囲で、出来ることから新潟現場セミナーを開催していきたいものです。全国の会員の皆さま、一人一会員の声掛けで、福祉文化のこころをひろめていきましょう！。学会に仲間入

りさせて頂き30年目

となります。平成9年に柏崎で開催した、福祉文化総大会、初日の懇親会で一番ヶ会長から注いでいただいたビールの味と「ご苦労さん」の一言が今でも思い出されます。達成感と充実感味わいたく、新潟現場セミナーを継続していきたいものです。

